古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(3)

安　藤　　充

キーワード：Sārasamuccaya、古ジャワ語、サンスクリット、Mahābhārata

前 2 編[1]に続き、Sārasamuccaya 第71偈から第110偈のテキスト（サンスクリット偈と古ジャワ語解説）のローマ字転写と和訳を示し、注でテキストの典拠やその異読、翻訳や解釈に関わる知見や問題点などを論じていく。

71.

sarvaṃ jihmaṃ mṛtyupadam ārjavaṃ brahmaṇaḥ padam /
etāvān jñānaviṣayaḥ kiṃ pralāpaḥ kariṣyate //[2]
曲がったことはすべて死に通じる。実直なことはすべてブラフマンに通じる。
知の領域はこれほどのことであり、饒舌には何の益もない。

mapan yāwat si tan ṛju / saṇḍa[3] nikaṅ prawṛtti niyata mṛtyupada ika / tan paṅdadyakĕn kalĕpasĕn / kunaṅ yan ārjawa pagwan ikaṅ prawṛtti / niyata brahmapada ika / mukti phala wih / maṅkana sarvadāya niṅ hiḍĕp / tan padon ikaṅ ujar adawā / ika ta pwa watwan iṅ hiḍĕp //
行為の支柱が真っ直ぐでない限り、それは死の境地をもたらし、解脱を生じることはない。他方、行為の基盤が真っ直ぐであれば、それは確実にブラフマンの境地をもたらし、解脱という果を生む。これが知識の全体像であり、冗長な言葉は不要である。つまりこれが知識の本質なのである。

72.

ānṛśaṃsyaṃ paro dharmaḥ kṣamā ca paramaṃ balam /
ātmajñānaṃ paraṃ jñānaṃ satyavrataṃ paraṃ vratam //[4]
優しさは最高の教え、寛容さは最高の力。
自己を知ることは最高の知識、誠実さを守ることは最高の誓い。

kunaṅ ikaṅ si tan nṛśaṅsya / ya ika mukhya niṅ dharma / yapwan si klan prasiddha niṅ kaśaktin ika / ika wruh ta amawāwakta / meṅěta ri sawawanya / ṅuniweh wruh ta riṅ ātmatattwa / ya ika paramārtha rahasyajñāna ṅaranya / kunaṅ wastu niṅ wrata ṅaranya / si satya juga //
人を傷つけないことは、最高の教えである。もし人が我慢強ければ、それは間違いなく力となる。自分自身を制御することを知り、均衡の取れた考えをもち、何よりも、自らの本質を知るものは、真に秘密の知識[5]をもつと言われる。また、最高の誓いというのは、誠実に尽きる。

73.

kaṇṭakān kūpam agniṃ ca varjayanti sadā narāḥ /
tathā nṛśaṃsakarmāṇaṃ varjayanti naradhamam //[6]
人は棘や井戸や火を常に避ける。同様に、人を傷つける行為をする最低の人間を避ける。

nihan hala niṅ nṛśaṅsa / tan kinoněṅan juga yan hana riṅ rāt / de niṅ wwaṅ adhama tuwi / tan kinahyunan ika / kadi krama nikaṅ wwaṅ sumiṅgahi[7] rwi / sumur māti[8] / apuy kuněṅ / maṅkana tikaṅ sarwajana n tumiṅghalakěn[9] ikaṅ wwaṅ nṛśaṅsa //
人を傷つけるのが悪であるのはこうである。たとえこの世に存在するとしても卑劣な悪人の行為は好まれることはない。求められることはない。人が棘や井戸や火を避けるのと同じである。このように、皆、人を傷つけるような人間を見捨てるべきである。

74.

dānād damo viśiṣṭo hi dānam unnatikāraṇam /
dātā kupyati no dāntas tasmād dānāt paro damaḥ //[10]
布施よりも自制のほうが優れている。なぜなら、布施は高揚の原因となるゆえ。
布施する人は怒りもするが、自制ある人はそうではない。それゆえ、布施よりも自制が上である。

nihan kottaman iṅ dama / dama ṅaran iṅ kopaśaman / makahetu meṅět / wruhta mituturi manahta / yatika lěwih saṅke dāna / ikaṅ dāna ṅaranya / kīrti lawan uccapada / phala nika / ndān sor ika de niṅ dama / apan ika saṅ dātā / dadi sira tan pakadṛbya ṅ dama / kataman krodhādi / kunaṅ saṅ makadṛbya ṅ dama / nitayanya tan wipatha sira apan atutur / mataṅnyan lěwih taṅ dama saṅke dāna //
自制の優れた点はこうである。自制というのは心が静穏であることであり、明晰な意識の原因となる。（つまり）自分を知ること、自分の心を制御することである。それは布施よりも優れている。布施とは、名声や高い地位[11]がその結果としてある。しかし自制

よりは下である。なぜなら布施をする者は、自制を得られないこともあり、（そうなると）怒りなどに左右される。しかし、自制を身につけた者は、決して道を外すことはない。なぜなら彼は常に意識を保っているからである。それゆえ自制は布施よりも優れている。

75.

nodakaklinnagātro hi snāta ity abhidhīyate /
sa snāto yo damasnātaḥ sa bāhyābhyantaraśuciḥ //[12)]
体を水で湿らせても沐浴した者とは言われない。
自制の沐浴をした者が沐浴した者である。その者は内も外も清められている。

lawan ta waneh / tan ikaṅ atĕlĕs winasĕhan śarīranya / kĕtikaṅ madyus ṅaranya / kunaṅ ikaṅ prasiddhâdyus ṅaranya / ika saṅ makadṛbya ṅ dama juga / saṅ sinaṅgah dānta / si tikâdyus liṅ saṅ paṇḍita / śuci riṅ wāhyābhyantara //
またさらに（こう言われる）。体を洗って濡らした人が沐浴したというわけではない。本当に沐浴した人というのは、自制をものにした人である。その人は自制者と呼ばれる。それが沐浴者であると賢者は言う。（自身の）外も内も清らかである（からである）。

76.

na hṛṣyati mahaty arthe vyasane ca na śocati /
yo vā parimitaprajñaḥ sa dānta iti kīrtyate //[13)]
大きな富があっても大喜びせず、苦境にあっても悲しまない。
調御された知性を持つものが自制ある者と称えられる。

nihan ta lakṣaṇa niṅ dānta / tar lĕñok / tan agiraṅ yan anĕmu sukha / tan prihatin an katĕkan duhkha / enak ta wruh nira riṅ tattwa / wĕnaṅ ta sira tumaṅguhi[14)] manah nira apan pakadṛbya dama / sira ta dānta ṅaran ira //
自制ある者の特徴はこうである。嘘偽りがなく[15)]、幸福を得ても浮かれず、苦難に陥っても沈まず、真理を知って心満ちる。心を抑制することができるのは、自制を身につけているからである。こういう人が自制ある人と呼ばれる。

77.

indriyāṇy eva tat sarvaṃ yat svarganarakāv ubhau /
nigṛhītanissṛṣṭāni svargāya narakāya ca //[16)]

天界と地獄のいずれも、そのすべては感覚器官（次第）である。
把捉されていれば天界へ、放任されていれば地獄へと至る。

nyaṅ pājara waneh / indriya ikaṅ sinaṅah svarganaraka / kramanya / yan kawaśa kahṛtanya / ya ika sākṣāt svarga ṅaranya / yapwan tan kawaśa kahṛtanya / sākṣāt naraka ika //
ほかにこういう人もいる。感覚器官（こそ）が天界とか地獄とか呼ばれるものである。どのようにか（と言えば）、もし（感覚器官が）（その人の）支配下にあり調御されていれば、天界が現前すると言われ、支配下になく調御されていなければ、地獄が現前する[17]。

78.

jīvitaṃ sādhuvṛttaṃ ca yogakṣemaṃ balaṃ yaśaḥ /
dharmam arthaṃ ca puṣṇāti nṛnām indriyanigrahaḥ //[18]
感覚器官の調御は、人々の生命、善行、安全、力、名声、正義、財産を育てる。

phala niṅ kahṛtan iṅ indriya / nihan / kadīrghāyuṣan / ulah rahayu / pagĕh niṅ yoga / kaśaktin / yaśa / dharma / artha / yatika katĕmu ri kawaśan iṅ indriya //
感覚器官の調御の成果は次のようである。長寿、善き行い、精神統一、権力、名声、正義、財産。これらは感覚器官を制御すると得られるものである。

79.

manasā trividhaṃ caiva vācā caiva caturuvidham /
kāyena trividhaṃ cāpi daśakarmapathāṃś caret //[19]
精神により四種、言語により三種、身体により四種、十種の行為の道を実践すべきである。

hana karmapatha ṅaranya / kahṛtan iṅ indriya / sapuluh kwehnya / ulahakĕna / kramanya / prawṛttyan iṅ manah sakarĕṅ / tĕlu kwehnya / ulahan iṅ wāk / pāt / prawṛttyan iṅ kāya / tĕlu / piṇḍa sapuluh / prawṛttyan iṅ kaya / wāk / manah / keṅĕnta //
行為の道というのは、感覚器官の調御であり、その数は十である。行うべきことを列挙すれば、今、精神に関して行うべきは三種、言語に関する行為は四種、身体に関して行うべきは三種、合わせて十種である。身体・言語・精神について行うべきことをよく意識しなければならない。

80.

anabhidhyā parasveṣu sarvasattveṣu cāruṣam /
karmaṇāṃ phalam astīti trividhaṃ manasā caret //[20)]
他人の所有物を欲せず、一切の生類に怒りを覚えず、
行為には結果があると信じる。精神によりこの三種を行うべきである。

prawṛttyan iṅ manah rumuhun ajarakĕna / tĕlu kwehnya / pratyekanya / si tan eṅin adṛkya ri dṛbya niṅ len / si tan krodha / riṅ sarwasattwa / si mamituhwa ri hana niṅ karmaphala / nahan taṅ tiga ulahan iṅ manah / kahṛtan iṅ indriya ika //
まず精神に関して行うべきことが教示される。三種ある。一つ一つ挙げれば、他人の財物を欲せず妬まないこと。一切の生類に対して怒らないこと。行為の結果の存在を認めること。この三つが、精神について行うべきことである[21)]。それは感覚器官の制御にほかならない。

81.

asatpralāpaṃ pāruṣyaṃ paiśunyam anṛtaṃ tathā /
catvāri vācā rājendra na jalpen nānucintayet //[22)]
妄言、罵倒、陰口、はたまた虚言。
言語に関して、この四つを口にしてはならない。思ってはならない。

nyaṅ tan prawṛttyan iṅ vāk / pāt kwehnya / pratyekanya / ujar ahala / ujar aprĕgas / ujar piśuna / ujar mithyā / nahan taṅ pāt siṅgahanan iṅ vāk / tan ujarakĕna / tan aṅĕn-aṅĕnan / kojaranya //
言語に関して、してはならないことはこうである。四種ある。一つ一つ挙げれば、悪意ある言葉、乱暴な言葉、陰で中傷する言葉、騙し言葉[23)]。これら四種は、言語に関して避けるべきである。口にしてはならないし、思ってもいけない。このように言われている。

82.

prāṇātipātaṃ stainyaṃ ca paradārān athāpi ca /
trīṇi pāpāni kāyena sarvataḥ parivarjayet //[24)]
殺生、窃盗、はたまた邪淫。
身体に関して、この三つをすべて避けなければならない。

nihan yaṅ tan ulahakĕna / sy amāti-māti maṅahal-ahal / si paradāra / nahan taṅ tĕlu tan ulahakĕna

riṅ asiṅ riṅ parihāsa / riṅ āpatkāla / riṅ paṅipyan tuwi siṅgahana jugêka //
次のことはしてはならないことである。人殺し、泥棒、不倫。この三つはどんなときもしてはならない。戯れでも、急迫のときでも、夢を見ているときでも。絶対に避けなければならない[25]。

83.

kāyena manasā vācā yad abhīkṣaṃ niṣevyate /
tad evāpaharaty enaṃ tasmāt kalyāṇam ācaret //[26]
身体により、精神により、言語により、繰り返し行って味わったことは
その人を支配する[27]ことになる。だからこそ善行をすべきである。

apan ikaṅ kinatahwan ikaṅ wwaṅ kolahanya / kāṅĕn-aṅĕnanya / kocapanya / ya juga bwat umalap ikaṅ wwaṅ / jĕnĕk katahwan irika wih / mataṅnyan ikaṅ hayu atika ṅabhyāsan / ri kāya / wāk / manah //
行為であれ、思考であれ、言葉であれ、人がそれによく馴れていることはその人を虜にする。それに馴れ耽ってしまうのである。だからこそ、身体でも、言語でも、精神でも、善いことを実践すべきである。

84.

vāci karmaṇi citte ca durlabhaḥ suguṇo janaḥ /
yasya tv evaṃvidhaṃ kāryaṃ sa janaḥ sarvadurlabhaḥ //[28]
言葉も行為も精神も高潔な人は得難い。
未来もそうである人は全く得難い。

huwusnya n durlabha ikaṅ suguṇa / riṅ kāya / vāk / manah / hana pwa maṅkĕna[29] sira wĕkas niṅ durlabha / tan maṅkĕn ya[30] juga sira n pinakewĕh //
身体と言語と精神（すべて）に関して高潔な人は得難いものであった。（今や）そうとみなされる人（すら）得難い中でも極めつけである。（実際）難しすぎて、（そのような人がいるという）考えすら及ばない。

85.

manasā niścayaṃ kṛtvā tato vācā vidhīyate /
kriyate karmaṇā paścāt pradhānaṃ vai manas tataḥ //[31]
心で決めて言葉で広がる。それから行為として行われる。
したがって、心こそ第一である。

kunaṅ saṅkṣepanya / manaḥ nimitta niṅ niścayajñāna[32] / dadi pwa ṅ niścayajñāna / luměkas taṅ ojar / luměkas taṅ maprawṛtti / mataṅnyan manaḥ ṅaran ika pradhāna n maṅkana //
さて要点を言えば、心は迷いなき判断の元である。決断がなされれば、話が始まり、行動が起こる。したがって心が最も重要と言われる。そういうことである。

86.

mano hi mūlaṃ sarveṣām indriyāṇāṃ pravartate /[33]
śubhāśubhāsv avasthāsu kāryaṃ tat suvyavasthitam //
心はすべての感覚器官の根本として作用する。善悪いずれの状況においても、確固たる礎のもとに行動がなされるべきである。

apan ikaṅ manaḥ ṅaranya / ya ika wit niṅ indriya / maprawṛtti[34] ta ya riṅ śubhāśubhakarma / mataṅnyan ikaṅ manaḥ juga prihěn kahrětanya sakarěṅ //
心というのは感覚器官の根幹である。その活動は善悪（いずれも）の行為にわたる。それゆえ、しばしの間、心を制御するように努めなければならない。

87.

dūragaṃ bahudhāgāmi prārthanāsaṃśayātmakam /
manaḥ suniyataṃ yasya sa sukhī pretya veha ca //[35]
心は遠くへあちらこちらへと赴き、望みや疑いをその本性とする。
心がよくおさまっている人は、この世でもあの世でも幸せである。

nihan ta krama nikaṅ manaḥ / bhrānta luṅhā swabhāwanya / akweh inaṅěn-aṅěnya / dadi prārthana dadi saṅśaya / pinakāwaknya / hana pwa wwaṅ ikaṅ wěnaṅ humrět manaḥ / sira tika maṅgaḥ amaṅgiḥ sukha / maṅke riṅ paraloka waneh //
心の状態はこうである。惑いさまようのがその本質である。あれこれ思いを巡らせ、あるいは欲望を、あるいは疑いを抱くものである。そうした心を調御できる人がいれば、その人は確実に幸福を得る。あの世でも同じである。

88.

sarvaṃ paśyati cakṣumān manoyuktena cakṣuṣā /
manasi vyākule jāte paśyann api na paśyati //[36]
眼をもつ人は、心と連動した眼ですべてを見る。
しかし、心が乱れると、眼で見ているようで何も見てはいない。

lawan tattwa nikiṅ manah / nyaṅ mata wuwusĕnta / naṅ mulat riṅ sarwawastu / manah juga sahāya niṅ mata nikân wulat / kunaṅ yan wyākula manahnya / tan ilu sumahāyéṅ[37] mata / mulata towi irikaṅ wastu / tan katon juga ya de nika / apan manah ikaṅ wawarĕṅö[38] ṅaranya / hiṅanyan pradhāna ṅ manah kaliṅan ika //
さらに心の真相について、眼のことを語ろう。眼がすべての事物を見ると、心は物を見ている眼に付き従う。しかし心がまどっていると、心は眼に伴うことがない。たとえ物を見ても、眼で見られているのではない。なぜなら、心は（本来）（対象に）留めると言われるからである。。したがって、心は最重要であると言われる。

89.

straiṇasyāvācyadeśasya klinnanāḍīvraṇasya ca /
abhede 'pi manobhedāj janaḥ prāyeṇa vañcyate //[39]
女性の陰部と浸潤した潰瘍とに違いはないが、人は心の分別により惑わされる。

nihan mara keṅĕtanta / hana ya awayawa niṅ strī / tan yogya wuwusĕn pradeśanya / rinahasya wih / mwaṅ hana ta kani[40] atĕlĕs aṅuruwĕk[41] / ika taṅ rinahasyaṅ strī / lawan ikaṅ kani / ndya pahi nika / yan iṅĕt-iṅĕtĕn / ndān kabañcana juga ṅ wwaṅ de nika / sumaṅgah ya dudū / makahetu wikalpa niṅ manah/ hiṅanyan manah ikaṅ pradhāna ṅaranya //
次のことをよく考えなければならない。女性の体には言葉に発すべきでない部位がある。まさに秘するべきである。他方、化膿して浸潤している傷がある。（前者は）女性として秘するべきところであり、また（後者の）傷もあからさまにしてはならない。これらに何の違いがあろうか。考えてみれば、人が騙されているのは、ほかとは違っている（ものだ）という疑いであり[42]、それが心の疑惑の原因となる。したがって心が最も重要だと言われるのである。

90.

lālety udvijate loko vaktrāsava iti spṛhā /[43]
pravañcyate janenātmā saṃjñāśabdaiḥ svayaṃkṛtaiḥ //
「唾」と言えば引いてしまうが、「お口のお酒」と言うと人は欲しくなるもの。
自ら生み出した言葉の標識に騙されている。

lawan waneh / hana ya mukhāsawa[44] ṅaranya / madya / matahapan tutuk asilih / maṅkana rakwa krama nika saṅ kāmī mwaṅ kāminī / yan dĕlön / tan hana bhedanya lawan ilu / ya sukhāsawa / ndān yan ilu paṅaran iṅ wwaṅ / elik ajĕjĕb ya / yapwan mukhāsawa paṅaranya / harṣa ya / ta kari n umañcana awaknya / makasādhana ṅaran karika ṅ wwaṅ / an maṅkana / ikaṅ ṅaran gawe nikaṅ

wwaṅ ika / hiṅanyan agĕlis ikaṅ manah kaliṅan ika //
さらに他にこう言われる。「お口の露」と呼ばれるお酒があり、口で交互に受けるのが、愛する男女の儀式である。（ただし）それは「唾」と異なるものではない。しかし「お口の露」が「唾」と言われれば強く嫌われ、「お口の露」と言われれば好まれる。人間が呼称によって自らを欺いているのである。このように名称が人間を左右するのである。したがって、心というのは激しいものであると言われる。

91.

abhinneṣv api kāryeṣu bhidyate manasaḥ kriyā /
anyathaiva stanaṃ putraś cintayaty anyathā patiḥ //[45)]
なすべきことには相違はないが、心によって行為に違いが生じる。
子供が思う乳房と夫が思う乳房は別物である。

lawan toněn waneh / tuṅgala tuwi ikaṅ wastu / dudū juga āgraha niṅ sawwaṅ-sawwaṅ irika / wyaktinya / nā ṅ susu niṅ ibu / dudū āpti[46)] nikaṅ anak / an moněṅ iṅ ibu / lawan āpti nikaṅ bapa / hiṅanyan manah magawe bheda //
他にもこのように見るべきである。事物はそれ一つだけだが、それに対する思い入れが人それぞれ異なる。実例を挙げれば、女性の乳房がある。母親を慕う子供が乳房を求めるのと、夫が求めるのとは異なる。要するに、心が違いを生み出しているのである。

92.

parivrāṭkāmukaśunām ekasyāṃ pramadātanau /
kuṇapaḥ kāminī bhakṣyam iti tisro vikalpanāḥ //[47)]
遊行者、色男、そして犬が、一人の女性の体に対して想うことは、亡骸、愛しき女、食べ物、と三様である。

nyaṅ dṛṣṭānta waneh / nahan saṅ bhikṣukabrata[48)] pariwrājaka / nahan yaṅ kāmuka / wwaṅ göṅ rāga sakta riṅ strī / nahan taṅ śṛgāla / ika ta katiga / ya ta mulat iṅ strī / rahayu sasiki kapwa dudū hāpti nika katiga / waṅke liṅ saṅ pariwrājaka / apan eṅět riṅ anityatattwa / liṅ nikaṅ kāmuka strī / těka sih iki / kunaṅ liṅ nikaṅ śṛgāla / wastu surasa bhakṣya ika / arah wetnya n wikalpa niṅ manah tinūt niṅ wastubheda //
ほかに次のような例を挙げよう。遊行期のバラモン行者、色男（すなわち）女性への情愛深い男、犬。この三者が女性を見たとして、一人の美女に対して三者の求めるものは別々である。遊行者は死骸だと考えるが、それは（人が）本性として無常であることを認識しているからである[49)]。女好きの男は、その女性に愛情を抱く。他方、犬が思うの

は、（その女性が）おいしい食べ物だということである。なんと、こういうわけで、心が（一つに）定まっていないことが（一つの）事物を別様にとらえることにつながっているのである。

93.

bhāvaśuddhir manuṣyasya vijñeyā sarvakarmasu /
anyathā cumbyate kāntā bhavena duhitānyathā //[50)]
いかなる行為においても、人間の心情の清らかさが認知されるべきである。
妻への口づけと娘への口づけは心情としては別物である。

lawan waneh / eńět juga kita / an śuddhi niń manah / nikań wwań tinūt niń prawṛttinya / riń asiń wastu / wyaktinya / nahan ya ń bapa humarěk[51)] i strīnya / muwah hinarěknya ta anaknya / ndān dudū juga āptinyan ikān arěk i[52)] ika kalih / āptinyan kapwa harṣândělanya / hińanyan manah kāraṇa riń kriyābheda //
ほかにこう述べられる。ひとの心が清らかであることはすべての事物に対する振る舞いに関係していることを認識しなさい。わかりやすく言えば、夫が妻にキスをし、娘もまた（父に）キスされるとする。しかしキスをする思いはそれぞれ異なる。根本のところではどちらも喜びという思いではあるが。こういうわけで、心が行為の区別の原因である。

94.

abhidhyāluḥ parasveṣu neha nāmutra nandati /
tasmād abhidhyā saṃtyājyā sarvadābhīpsatā sukham //[53)]
欲深い者は、この世でもあの世でも、他人の所有物に満足しない。
それゆえ、常に幸福を追求する人は、貪欲を捨て去るべきである。

hana ta maṅke kramanya / eńin ri dṛbya niń len / maděńki ri sukhanya / ikań wwań maṅkana / yatika pisanińun / těměwa ń sukha maṅke / riń paraloka tuwi / mataṅnyan aryakěna ika / de saṅ mahyun laṅgěń aněmwa ń sukha //
このようなことがある。他人の財物を欲しがり、他人の幸福を妬む。そのような人はこの世でも、またあの世でも、決して幸福を得ることはない。それゆえ、幸福を常に得たいと願う者は、それらを捨て去らねばならない。

95.

sadā samāhitaṃ cittaṃ naro bhūteṣu dhārayet /

nābhidhyāyen na spṛhayen nābaddhaṃ cintayed asat //[54)]
人は生類に対し、常に気を配るべきである。求めすぎず、妬まず、無きものに執着しないことである。

nyāyêki kadeyākěnan iṅ waṅ / ikaṅ buddhi māsih riṅ sarwaprāṇī / yatika pagěhakěna / haywa ta děṅki / haywa ta iṅin / haywa ta humayam-ayam ikaṅ wastu tan hana / wastu tan yukti kuněṅ / haywa ika inaṅěn-aṅěn //
人が実践すべき行動原理とはこうである。すべての生類に（等しく）愛情を持つべきである。それをしっかりと保持しなければならない。妬んだり、貪欲になったりしてはいけない。存在しないもの、不適切なものに憧れてはいけない。それを思い描いてもいけない。

96.

niyacchāyaccha saṃyaccha cendriyāṇi manas tathā /
pratiṣedhyeṣv avadyeṣu durlabheṣv ahiteṣu ca //[55)]
避けるべきもの、褒められないもの、得難いもの、ためにならないものに対して、感覚器官と心とを引き離し、抑え、制御せよ。

mataṅnya hrětěn talyana / pagěhakěna ta pwa ikaṅ pañcendriya / lawan manah / haywa wineh mambahaṅ hinila-hila / wastu inupěn / wastu durlabha / wastu tan panukhêriṅ awasāna kuněṅ //
それゆえ、五つの感覚器官と心を、抑制し、結びつけ、安定させるべきである。してはならないとされていること、人に咎められるようなもの、得難いもの、最終的に幸福を与えないものを放任してはならない[56)]。

97.

yasyerṣyā paravitteṣu rūpe vīrye kulānvaye /
sukhasaubhāgyasatkāre tasya vyādhir anantagaḥ //[57)]
他人の財産、美貌、男らしさ、高貴な生まれ、幸福、幸運、厚遇に嫉妬する者の病は終わりなく続く。

ikaṅ wwaṅ īrṣyā ri paḍanya janma tumon māsnya / rūpanya / vīryanya / kasujanmanya / sukhanya / kasubhaganya / kālěmanya / ya ta amuhara īrṣyā iriya / ikaṅ wwaṅ maṅkana kramanya / yatika prasiddha niṅ saṅsāra ṅaranya / karakět laranya tan patamban //
人は自分と年格好が同じ人を見て、その富や容姿や力や家柄や幸せや名声や称賛を妬む。そういうことに対して嫉妬するものだ。人はそのような次第で、輪廻転生と呼ばれ

る苦難が必定となり、それにともなう病は治しようがない[58)]。

98.

kṣamāvatām ayaṃ lokaḥ paralokaḥ kṣamāvatām /
iha sammānam ṛcchanti paratra ca śubhāṃ gatim //[59)]
この世は忍耐ある人々のものである。あの世も忍耐ある人々のものである。
彼らは現世では名誉を得、来世ではすばらしき落ち着き先を得る。

nihan taṅ keṅěta / ikiṅ sarwabhāwa těka riṅ martyaloka / saṅ kṣamāwān makānu ika / kṣamāwān ṅaran ira / saṅ kölan upaśama / ika riṅ paraloka tuwi / anu nira tika apayapan maṅke inastuti / pinūjā kinatwaṅan / sira de niṅ rāt / riṅ paraloka / uccapada katěmu de nira //
次のことに留意しなければならない。人間界を含む一切の生類では、よく耐える者が主である[60)]。よく耐える者とは、我慢強く、自制する者である。それはあの世でも同じで、彼らのものである[61)]。なぜなら[62)]、この世では人々に褒められ称えられ、畏敬の念をもたれるし、あの世では至高の居所を獲得するからである。

99.

nātaḥ śrīmattaraṃ kiñcid anyat pathyataraṃ tathā /
prabhaviṣṇor yathā tāta kṣamā sarvatra sarvadā //[63)]
支配者にとって、いついかなるところでも、忍耐ほど気高く道理に適うものはない。

saṅkṣepanya / kṣamā ikaṅ paramārtha niṅ pinakdṛbya / pinakamāsmaṇik nika saṅ wěnaṅ lumage śakti niṅ indriya / nora luměwihana halěpnya / aṅhiṅ ya wěkas niṅ pathya / pathya ṅaran iṅ pathād anapetah[64)] / tan panasar saṅke mārga yukti / maṅgěh[65)] sādhana asiṅ parana / tan apilih riṅ kāla //
要するに、忍耐は感覚器官の力に抗することのできる人の財産、金や宝玉の中で最高のものである。それに勝るものは何もないと考えられる。まさに相応しきものの究極である。相応しきものというのは “pathād anapetah”[66)]、（すなわち）正しい道から逸脱しないことである。行き先がどこであれ、時に依らず、確かな（解脱の）方法である。

100.

yadi na syur manuṣyeṣu kṣamiṇaḥ pṛthivīsamāḥ /
na syāt sakhyaṃ manuṣyāṇāṃ krodhamūlo hi vigrahaḥ //[67)]
もし大地に等しき忍耐ある者が人間の中にいなければ、人間には友情がないことになる。不和は怒りに由来する故に。

apan ya tan hana saṅ kṣamāwān / saṅ kṣamāwān ṅaran ira / tan pahi lawan saṅ hyaṅ pṛthiwī / riṅ kapwa kölan / an maṅkana / tan hana niyata niṅ pamitran / krodhātmika awak iṅ sarwabhāwa / kapwa tâtukar[68] niyatanya //
なぜなら、忍耐ある人がいない。忍耐ある人というのは、常に耐えるという点では大地と異なるところがない[69]。そうであるから、友情なるものは確かに存在しない。生ある者はすべて怒りを本性としており、争いが絶えない。

101.

yaḥ samutpatitaṃ krodhaṃ kṣamayaiva nirasyati /
yathoragas tvacaṃ jīrṇaṃ sa vai puruṣa ucyate //[70]
蛇が古い皮を脱ぎ去るように、沸き起こった怒りを忍耐により捨て去る者は、人間と呼ばれる。

hana pwa sira wĕnaṅ maniṅgalakĕn krodha / makasādhana kṣamā / kadi krama niṅ ulā n tiṅgalakĕn limuṅsuṅanya / ri kapwa tan waluyakĕna muwah / ika saṅ maṅkana sira tika mahābuddhi ṅaran ira / maṅgĕh[71] sinaṅgah wwaṅ //
忍耐により怒りを捨て去ることができる人がいる。ちょうど蛇が抜け殻を捨て去るのと同じように。どちらももう元に戻ることはない。このような人は高潔だと言われる。真に人間だと言われる。

102.

na śatravaḥ kṣayaṃ yānti yāvajjīvam api ghantaḥ /
krodhaṃ niyantuṃ yo veda tasya dveṣṭā na vidyate //[72]
命あるかぎり殺し続けても、敵は全滅に至ることはないが、
怒りを制する術を知る者を憎む者はいない。

katuhwan / apan yadyapi wĕnaṅa ikaṅ wwaṅ ri musuhnya / tan kawadha n[73] pātyana śatrunya / asiṅ sakrodhanya[74] / sadawā ni[75] huripnya tah yan tūtakĕna gĕlĕṅnya tuwi / yaya juga tan hĕntya ni musuh nika / kuneṅ prasiddha niṅ tan pamusuh / saṅ wĕnaṅ humrĕt krodha nira juga //
真実はこうである。たとえ人が敵を制していても、敵を殺して阻むことがなければ、ありとあらゆる怒りが向けられる。ひとの怒りは命のある限り続く。敵が完全に消え去ることはないということである。しかし、まったく敵がいない場合もある。怒りを抑えることができる人である。

103.

avyādhijaṃ kaṭukaṃ śīrṣarogaṃ yaśomuṣaṃ pāpaphalodayaṃ ca /
satāṃ peyaṃ yan na pibanty asanto manyuṃ mahārāja piba praśāmya //[76)]
病気ではないのに頭痛がひどく、栄誉を損ない、悪い結果をもたらすもの。
善人は飲み込めるが、悪人は飲まないもの。偉大なる王よ、怒りを鎮め、飲み込まれよ。

nyaṅ saṅkiriman[77)] / hana ya ininum saṅ paṇḍita / maṅdani panas amuhara ṅělu / tan lara iki pih / maṅilaṅakěn yaśâpuhara pāpa tapwa ya / tan ininum iki de niṅ sāmānyajana / saṅ uttamapuruṣa juga sira wěnaṅ minum / sira tuhun śakti kaliṅanya / krodha ika maṅkana kramanya / yatika inuměnta / kawaśākěnanta śaktinya / tapwan těmu ṅ kopaśaman //
次のような謎謎[78)]がある。「賢者が飲むもので、熱を発し頭痛を引き起こすが、病ではない。名声をなきものにし、悪いことをもたらす。一般人は飲まず、すぐれた人のみ飲むことができる。真に力あるものと言われる（ものは何？）」怒りとはこのようなものである。そなたは（怒りを）飲み込みなさい。その力を制圧しなさい。心の平安を得られるように。

104.

ātmopamas tu bhūteṣu yo bhaved iha puruṣaḥ /
tyaktadaṇḍo jitakrodhaḥ sa pretya sukham edhate //[79)]
この世で他の生類に対し我がことのように接する人、
罰杖を捨て、怒りをおさめるその人は、あの世に行って幸を増す。

apayapan ikaṅ wwaṅ opaśama / tan pahi lawan awaknya ta pwa ikaṅ sarwabhāwa liṅnya arah harimbawā[80)] / tātan paṅdaṇḍa / tan kataman krodha / ya ika wyakti niṅ sarwasukha / apan maṅke n těmu ṅ sukha / riṅ paraloka sukha tah tiněmunya //
さてこういう人は心が静まっている。一切生類に対して自分と異なることがない（態度である）と言われる人、とても利他的な人である。ひとを打ち付ける杖を取ることなく、怒りにまかせることがない。これではあらゆる幸福（が得られるの）は明らかである。（そのような人は）かくして幸福を得る。あの世でもまた幸福が得られる。

105.

jātavairas tu puruṣo duḥkhaṃ svapiti sarvadā /
anirvṛtena manasā sasarpa iva veśmani //[81)]

敵意を抱く者は常に寝苦しい思いをする。
寝室に蛇がいるかのごとく心が落ち着くことがない。

kunaṅ ikaṅ wwaṅ aṅgöṅ tukar / sadākāla duhkha[82] ika saparanya / solahnya / riṅ paturwan tuwi / makanimitta / tan maṅgĕh ni hatinya / kadi krama niṅ aturu riṅ umah mesi sarpa //
他方、怒りが大きい人はどこへ行っても何をしても常に苦しむことになる。寝室でもそうである。なぜなら、蛇がいる家で寝ているのと同じように、心の落ち着きがないからである。

106.

āturasya kuto nidrā trastasyāmarṣitasya ca /
arthaṃ cintayato vāpi kāmayānasya vā punaḥ //[83]
病む者、恐れ慄く者、怒る者、財を心配している者、あるいは欲情している者。彼らに熟睡はない。

samaṅke mara tan enak turunya / pratyekanya / wwaṅ alara / wwaṅ atukut / wwaṅ hana kagĕlĕnya / wwaṅ umaṅĕn-aṅĕn sakāryanya / wwaṅ sarāga kunaṅ //
他方、心地よい眠りがないのは次のような人である。列挙すれば、病気の人、恐怖心ある人、怒りある人、やるべきすべてのことを心配する人、そして愛欲に満ちた人。

107.

akrodhanaḥ krodhanebhyo viśiṣṭas tathā titikṣur atitikṣor viśiṣṭaḥ /
amānuṣebhyo mānuṣāś ca pradhānā vidvāṃs tathaivāviduṣaḥ pradhānaḥ //[84]
怒りっぽい者より怒らない者のほうが優れている。我慢強い者のほうが我慢が効かない者より優れている。人間のほうが人間でない者より優れている。知恵ある者は無知の者より優れている。

saṅkṣepanya / lĕwih ikaṅ wwaṅ maṅawaśākĕna krodha / saṅke kinawaśākĕn iṅ krodha / mon pakalĕwih jugânugrahana[85] vīryādi tuwi / maṅkana ikaṅ kölan / lĕwih ika saṅke tan kölan / yadyapin maṅkana kalĕwihnya / maṅkana mānuṣajanma / lĕwih jugêka saṅke tanmānuṣa / mon lĕwh riṅ bhogopabhogādi / maṅkana saṅ paṇḍita / lĕwih sira saṅke tanpaṇḍita / yadyapin samṛddhya riṅ dhanadhānyādi //
要点を言えば、怒りを制する者は怒りに左右される者より優れている。たとえ（後者が）勇気などの資質に恵まれて優れるところがあるとしても。同様に、自制ある者は自制のない者より優れている。（前例のように何か他に）劣るところがあるとしても。同

様に、人間に生まれた者は人間でない者より優れている。いろいろな快楽などでは（後者が）優れているとはいえ。同様に、賢者は愚か者よりも優れている。（後者のほうが）財産や穀物を豊かに貯えているとしても。

108.

yat krodhano yajati yad dadāti yad vā tapas tapati yaj juhoti /
vaivasvatas tad dharaty asya sarvaṃ vṛthā śramo bhavati krodhanasya //[86)]
生贄も布施も、苦行も献火も、怒りに満ちた者が行えば、
太陽神の子がそのすべてを奪う。怒る者の苦労は虚しく消える。

apan ikaṅ wwaṅ kakawaśā de niṅ krodhanya / salwir niṅ pinūjākĕnya / sāwaka niṅ[87)] pawehnya dāna / salwir niṅ tapanya / salwir niṅ hinomakĕnya / ika ta kabeh bhaṭāra yama sira umalap phala nika / tan paphala iriya / twas ṅhel / mataṅnyat kawaśākĕna taṅ krodha //
怒りに支配される人は、いかなる儀式を奉じても、いかなる施しをしても、いかなる苦行をしても、いかなるものを聖火に投じても、その果実のすべてをヤマ神[88)]が奪ってしまう。その人に何の結果も残らず、徒労のみが心に残る。それゆえ、そなたは怒りを制御すべきである。

109.

nityaṃ krodhāt tapo rakṣec chriyaṃ rakṣec ca matsarāt /
vidyāṃ mānāvamānābhyām ātmānaṃ tu pramādataḥ //[89)]
怒りから苦行を、嫉妬から富を、称賛や誹謗から学識を、怠惰から自己を、常に守るべきである。

nihan taṅ kayatnākĕna / ikaṅ tapa rakṣan / makasādhana kapaḍĕman iṅ krodha ika / kunĕṅ hyaṅ śrī / paḍĕm niṅ īrṣyā paṅrakṣa ri sira / kunĕṅ saṅ hyaṅ aji / paḍĕm niṅ ahaṅkāra mwaṅ avamāna paṅrakṣa ri sira / yapwan karakṣanyâwakta / si tan pramāda sadhana irika //
次のように努めるべきである。怒りを滅することで苦行を守るべきである。また、富は嫉妬を滅することがその守護になる。学問は驕慢と誹謗を滅することがその守護になる。自己を守るには怠慢をなくすことである。

110.

krodho vaivasvato mṛtyus tṛṣṇā vaitaraṇī nadī /
vidyā kāmadughā denuḥ santoṣo nandanaṃ vanam //[90)]
怒りはヤマの司る死、渇愛はヴァイタラニー川、

学識は如意牛、満足はナンダナ園林。

lawan ta waneh / ikiṅ krodha sinaṅgah mṛtyu ṅaranya / maṅkana ikiṅ tṛṣṇā / ya ika lwah waitaraṇī ṅaranya / atyanta bībhatsa / durgama towi / atyanta riṅ tīs / atyanta riṅ panas wwainya / ikiṅ tṛṣṇā ta wastu niṅ waitaraṇī ṅaranya/ kuněṅ saṅ hyaṅ aji / saṅ hyaṅ rahasyajñāna / sira lěmbu mamětwakěn sakahyun / kunaṅ ikaṅ kasantoṣan / ya ika nandanawana ṅaranya / taman riṅ Indraloka / ikaṅ nandanawana ṅaranya / atyanta ri konaṅ-unaṅ //

またほかにこう説かれる。怒りは死と呼ばれると言われる。渇愛はワイタラニー川と呼ばれる。醜穢極まり、近づきがたく、極寒あるいは極熱の水をたたえる[91)]。渇愛はそのワイタラニー川に属する事物と言われる。他方、聖典の知識、奥義は望む限りのものを生み出す牛[92)]である。また満足はナンダナ園林と言われる。インドラ神の天界にある園であり、それがナンダナ園林と呼ばれ、魅力的なところこの上ない[93)]。

注

〈略号〉

IS	*Indische Sprüche* (Böhtlingk 1966)
Manu	*Mānava Dhaarmaśāstra* (Mandik 1992)
Mbh	*Mahābhārata* (Sukthankar and Belvalkar 1933–66)
MSS	*Mahāsubhāṣitasaṃgraha* (Sternbach 1974–2007)
OJED	*Old Javanese-English Dictionaary* (Zoetmulder 1982)
SS	*Sārasamuccaya* (Raghu Vira 1962)

1）安藤2018、安藤2019参照。

2）Raghu Vira が校訂注で指摘する Mbh12.80.20のほか、Mbh14.11.4も本偈とほぼ一致する（どちらも kariṣyate / kariṣyati の違いのみ）。ただし kariṣyate は Mbh 校注に異読として言及されていない。

3）OJED (p. 1647) の見出し語と用例に従い、校訂本の saṇḍā を修正。ただし、OJED 引用では、当該箇所を SS 72.1（Sārasamuccaya 第72偈の古ジャワ語解説文一行目）と誤記していることに注意。古ジャワ語では、prawṛtti（行為）を支えるもの（saṇḍa ないし pagwan）が曲がっているか真っ直ぐかという論を立てている。

4）Mbh 3.203.41 は d で para と satyavrata の語順が入れ替わっている以外は一致する。Mbh 校注によれば、本偈と同じ読みの写本が北方・南方とも複数存在する（B, D, G）。Mbh12.316.12、IS 950、MSS 4870 は、d が na satyād vidyate param と異なる。

5）サンスクリットにはない表現だが、古ジャワ解説者は第 2 偈でも rahasyajñāna を用いており、「究極、深奥」の意味合いを古ジャワ的に rahasya と表現したものと理解される。

6）Mbh 12.158.2がほぼ同一（b の sadā / yathā、d の naradhamam / narā naram の相違）。Mbh 校注に本偈と読みが一致する異読は見つからない。

7）OJED（s.v. siṅgah, p. 1580）の引用例では、sumiṅgah iṅ としている。

8）OJED (p. 1321) は sumur māti という連語で項目立てし、“dried-up well” という意味を示している。

9）テキストの tumiṅhalakĕn では意味が取れず、OJED（s.v. tiṅgal, p. 1700）の引用例に従い、読みをこのように修正（“to leave, abandon” の意味）。

10）Cf. Mbh 13.74.14:

dānair yajñaiś ca vividhair yathā dāntāḥ kṣamānvitāḥ /
dātā kupyati no dāntas tasmād dānāt paro damaḥ //

cd は同一であるが ab がまったく異なる。この ab に対する異読の一つが次のとおり：

dānād damo viśiṣṭo hi dānaṃ kiṃ cid dvijātaye /

b は大きく異なるものの、こちらの異読であれば、cd と合わせて SS 第74偈にほぼ等しい。

11）サンスクリットの unnati を古ジャワ解説では kīrti と uccapada でパラフレーズしているのが注目される。

12）Cf. Mbh 13.111.9:

nodakaklinnagātras tu snāta ity abhidhīyate /
sa snāto yo damasnātaḥ sabāhyābhyantaraḥ śuciḥ //

前半は hi / tu の相違のみだが、後半は d の語句の切り方による解釈の違いが興味深い。Mbh では「自制の沐浴をして、身の内も外も（すべて）清浄になった者は（真の）沐浴者である」という意味になり、第75偈の読みよりも本文の述語 “snāta” が際立つ。ただし、古ジャワ解説の言い回しから推察すれば、現行の SS テキストと同じ区切りで理解されていたと思われる。

13）Cf. Mbh 12.213.15:

na hṛṣyati mahaty arthe vyasane ca na śocati
sa vai parimitaprajñaḥ sa dānto dvija ucyate

前半は本偈と同一だが、後半は下線部の表現が異なっている。Mbh 校注には本偈のような異読をもつ写本についての言及がない。

14）テキストの tumaṅguh i という区切りを修正（tumaṅguhi: “to warn, admonish, restrain”）。

15）サンスクリット偈にはない形容であり、校訂者はこの語に疑問符をつけて、意味がとれないことを示しているが、leñok 自体は OJED に登録され、“untruthful, dishonest, insincere” という意味がはっきりしているので、古ジャワ解説者がその意味でパラフレーズしたと解釈してよいだろう。

16）Mbh 3.202.17 は本偈とほとんど一致する（c の nissṛṣṭa / visṛṣṭa の相違のみ）。また MSS6059 は Mbh の方と同一である。Mbh 校注には nissṛṣṭa という異読は掲載されていない。

17）サンスクリット偈が dative で方向（行き先）が示しているところを、古ジャワ解説では、sākṣāṭ（“before one’s eyes, manifestly, visibly, really”）を用いて、それらが現実となるという意味合いで表現している。

18）本偈のように、indriyanigraha が諸々のよい結果を生み出すという趣旨の金言は他のサンスクリット文献に見当たらないが、indriyanigraha を他の善行とともに列挙している例は Mbh, Manu などに見られる：

Cf. Mbh 12.23.8:

tapo yajñas tathā vidyā bhaikṣam indriyanigrahaḥ /
dhyānam ekāntaśīlatvaṃ tuṣṭir dānaṃ ca śaktitaḥ //

Cf. Manu 12.31:

vedābhyāsas tapo jñānaṃ śaucam indriyanigrahaḥ /

dharmakriyātmacintā ca sāttvikaṃ guṇalakṣaṇam //

19）本偈ではいわゆる「十善業」について、manas（意）（心理作用）で四種、vacas（口）（言語表現）で三種、kāya（身）（身体動作）で四種、実践すべきであると説くが、相応する Mbh の偈では、kāya と manas の順序が入れ替わり、その十の行為をしないように（tyajet）と説くのが対照的である。

Cf. Mbh 13.13.2:

kāyena trividhaṃ karma vācā cāpi caturvidham /

manasā trividhaṃ caiva daśa karmapathāṃs tyajet //

第80偈からの三偈では、意・口・身の順で具体的な説明をしているので、SS のテキストではもともと今の第79偈のように manas を最初に挙げていたと思われる。

20）Mbh 13.13.5（= IS 247）とほぼ同一（b の cāruṣam / sauhṛdam の相違のみ）。cāruṣam という異読は Mbh 校注で言及されていない。

21）仏教では abhidhyā（貪）・vyāpāda（瞋）・mithyādṛṣṭi（邪見）を manas（意）に関する三悪業とし、それらをしないこと（-prativrati）を善業としている。

22）Mbh13.13.4 と完全に一致する。同一の偈が IS 749 にも収録されている。

23）仏教では mṛṣāvāda（妄語）・pāruṣya（悪口）・paiśunya（両舌）・saṃbhinnapralāpa（綺語）を vāc（口）に関する四悪業としている。

24）Mbh 13.13.3 とほとんど同一（paradāra- の単数・複数の相違のみ）。Mbh 校注によれば、本偈と同じく paradārān とする写本も北方版にいくつか存在する。

25）仏教では prāṇātipāta（殺生）・adattādāna（偸盗）・kāmamithyācāra（邪淫）を kāya（身）に関する三悪業としている。古ジャワ語では、「いかなるときもそれらを避けるべし」として、parihāsa、āpatkāla というサンスクリット語由来の語を用いて補足説明しているが、Mbh にも Manu にも、これに類する叙述は見当たらない。

26）Mbh 5.39.42 が本偈とほとんど一致（kāyena / karmaṇā、niṣevyate / niṣevate の相違のみ）。ただし Mbh 校注の異読には kāyena も nisevyate も挙げられていない。

27）apa√hṛ は一般に “to take off, bear off, carry off”（奪い去る）という意味だが、「対象の本質を奪い去る」というところから “to overpower, subdue, attract, affect, influence” という意味合いももつ。対応する古ジャワ語 umalap も原義は「取る」で、文意に従って比喩的に解釈しておく。

28）サンスクリット文献でこれと一致もしくは類似する偈を収録するものは見つかっていない。

29）校訂者は疑問符をつけて māṅkana としているが、OJED の引用例（s.v. maṅkĕn > aṅkĕn, p. 104）を参考に、写本の読みの一つを採用して修正。

30）校訂者は疑問符をつけて māṅkanya としているが、写本の読みと OJED の引用例（s.v. maṅkĕn > aṅkĕn, p. 104）を参考に読みを修正。

31）Cf. Mbh 3.278.27（IS 4688 はこれと同一）：

manasā niścayaṃ kṛtvā tato vācābhidhīyate /

kriyate karmaṇā paścāt pramāṇaṃ me manas tataḥ //

一部の表現（下線部）が微妙に異なるがほぼ一致している。

32）サンスクリットの niścaya を古ジャワ語で niścayajñāna と補っているのが注目される。古ジャワ語では niścaya が一般的に形容詞として用いられる（“certain, sure, convincer, feeling sure” etc.）(pp. 1194–95) ことから、「決然とした心持ち」（“a mind which is certain, decides without doubt or hesitation”）という意味合いをもたせるために名詞で受けたと推測されるが、

citta や manah でなく jñāna を用いているのが特殊である。古ジャワ語では jñāna は複合語の後文では主に “knowledge”（知識〈の集積〉）を意味する（Gonda 1998参照）。

33）Raghu Vira は指摘していないが、前半はシヴァ教パーシュパタ派の聖典 *Pāśupatasūtra* の注釈書 *Pañcārthabhāṣya*1.9.101がかなり類似していることがわかる：

mano hi mūlaṃ sarveṣām indriyānāṃ pravartane /
śubhāśubhāvasthāsu tac ca me suvyavasthitam //

こちらの読みの方が文意が通る。なおこの偈の少し前の偈（1.9.99）が古ジャワ版 Bhagavadgītā に紛れ込んでいることを筆者はすでに指摘しており（安藤2002）、今回の発見とあわせると、*Pañcārthabhāṣya* が古ジャワ世界に与えた影響をさらに検証、考察する必要性があると思われる。

34）古ジャワ語解説で、ma- 語幹で動詞的に表現していることから、サンスクリット偈がもともと pravartate であったと推察される。

35）Mbh 12.187.36はほぼ一致する（d の vā と ca の相違のみ）。ただし、vā という異読は Mbh 校注には挙げられていない。Mbh 12.224.34は後半のみ本偈の前半と一致する。

36）Mbh 12.180.16は下線部のみ本偈と異なる：

sarvaṃ paśyati yad dṛśyaṃ manoyuktena cakṣuṣā /
manasi vyākule tad dhi paśyann api na paśyati //

Mbh 校注には本偈に通じる異読についての言及がない。他方、Mbh 12.299.16は部分的にしか本偈と一致しないものの、同様なメッセージを伝えている：

cakṣuḥ paśyati rūpāṇi manasā tu na cakṣuṣā /
manasi vyākule cakṣuḥ paśyann api na paśyati /
tathendriyāṇi sarvāṇi paśyantīty abhicakṣate //

37）OJED 引用例（s.v. sahāya, p. 1598）では sumahāya ṅ としている。

38）校訂本が wawa と rĕṅö を区切っているのを修正。

39）Raghu Vira は指摘していないが、アタルヴァ・ヴェーダ系のマイナーウパニシャッドの一つ *Nāradaparivrājaka-Upaniṣad* の4.29がほぼ一致する：

strīṇām avācyadeśasya klinnanāḍīvraṇasya ca /
abhede ‘pi manomedāj janaḥ prāyeṇa vañcyate //

40）サンスクリット偈では nāḍīvraṇa（“an ulcer”）と表現しているが、古ジャワ語では kani（“wound”）と単純明快である。

41）校訂テキストは疑問符付きで haṅuruwak とするが、写本の他の読みと OJED の引用例（s.v. tĕlĕs, p.1982）に従い修正。ただし、OJED（s.v. kuruwĕk, p. 934）でも意味は疑問符付きである（“suppurating?, oozing?”）。

42）サンスクリットの manobheda をパラフレーズし、本質的には異ならないのに、相違を前提（先入観）として別のものと考えがちな心作用を巧みに解説しているのが読み取れる。

43）Mbh 校注によれば、Mbh 13.43.12につづく偈の一つ（*0301_5）が、この半偈にほぼ一致する：

lolety udvijate loko vaktrāsava iti spṛhā /

この異読の一節は南方版の一部の写本（T, G）に含まれている。

44）サンスクリットの vaktrāsava（“mouth-liquor, saliva”）を古ジャワ語では mukhāsawa（“nectar of lips”）と言い換えている。OJED には waktrāsawa は登録されていない。なぜ vaktra から mukha への置換が起こったかは不詳である。古ジャワ解説では、そういう名称の（ṅaranya）酒（madya, “any intoxicating liquor”）であると解釈しており、もともと比喩的に用いられて

いた āsava（āsawa）が、具体的に何らかのアルコール飲料であるというふうに拡大解釈されたプロセスが見て取れる。

45）MSS 2288 と同一。

46）OJED（p. 115）が示すように、古ジャワ語では āpti は動詞（“to obtain, reach; to desire, wish”）として用いられるのが主だが、この文脈では名詞派生形 kāpti（“desire, wish”）と同じく名詞として用いられていることが明らかである。サンスクリット偈の cintayati（“to think, consider; to consider as”）よりも踏み込んだ表現をしている。

47）本偈とほとんど同一の偈がインド哲学綱要書 *Sarvadarśanasaṃgraha* に含まれる（Madhava 2009, p. 12, ll. 3–4、bhakṣyam / bhakṣya の相違のみ）。同じ偈が Nāgarjuna の *Bodhicittavivarana* 断片にも含まれている。Raghu Vira はこれらには言及せず、IS 1344 が本偈に近似すると指摘する。しかし IS の偈は趣旨は同じながら表現が大きく異なり、IS 所収の偈でいえば、実は IS 3967 こそ本偈とほぼ一致する（前 2 例と同じく bhakṣyam / bhakṣya の相違のみ）。

48）校訂テキストは bhikṣuka brata と区切っているが、OJED（p. 242）が一語として項目立てして本箇所の用例を引いている（意味は (“leading the religious life”) ことに準拠し、読みを修正する。

49）古ジャワ語解説では、人の世の無常という真理（anityatattwa）を知るゆえに、遊行者が女体を死骸ととらえる、と的確に述べている。

50）IS 4579 が本偈とほぼ同一（manuśyasya vijñēyā / manuśyais tu kartavyā の相違のみ）。

51）arĕk の -um- 派生形は OJED に登録されていない。

52）校訂テキストは āptinyan ikānarĕki としている。arĕk がここでどういう派生形で表現されているのかはっきりわからないため、ほかの区切り方を仮に示しておく。

53）Raghu Vira の注記にはないが、MSS 2269 と同一。

54）Mbh 12.208.8 は下線部以外ほぼ一致する：

tasmāt samāhitaṃ buddhyā mano bhūteṣu dhārayet /
nāpadhyāyen na spṛhayen nābaddhaṃ cintayed asat //

ただし Mbh 校注の異読に本偈の読みと通じるものはない。

55）Mbh 12.105.46ef–47ab は下線部以外ほぼ一致する：

niyaccha yaccha saṃyaccha indriyāṇi mano giram /
pratiṣiddhān avāpyeṣu durlabheṣv ahiteṣu ca //

ただし、Mbh 校注に、本偈のような abcd で構成される偈の存在、あるいは本偈に通じる異読をもつ写本についての言及は見つからない。

56）サンスクリット偈では対格で表した indriya と manas（A）が、処格で列挙した四者（B）にとらわれないように抑制すべきと説く。他方、古ジャワ語解説では、A の二者の調合、及び B の監理の要、という異質な説明となっている。

57）Mbh 5.34.40 は下線部以外ほぼ一致する：

ya īrṣyuḥ paravitteṣu rūpe vīrye kulānvaye /
sukhe saubhāgyasatkāre tasya vyādhir anantakaḥ //

Mbh 校注によれば、c 冒頭の sukha- を複合語とする本偈と同じ読みをもつ写本は南方・北方とも少なからずある。

58）サンスクリット偈で「(嫉妬の）病に終わりなし」としているところを、古ジャワ語では saṅsāra という用語まで用いて踏み込んだ解釈をしている。

59）Mbh 3.30.42 は b の一部の相違（paralokaḥ / paraś caiva）以外は一致する。caiva でなく lokaḥ とする異読がいくつかの北方版写本（K, D）にあることが Mbh 校注からわかる。

60）校訂テキストの makanu を修正、“to have as something, to possess” という意味を文脈に即して訳しておく。

61）anu（校訂テキストの hanu を修正）は “someone (something) or other” という意味（OJED, p. 89）だが、ここでは、サンスクリット偈が属格で表現している所有の意味合い、及び前出の makānu との類推から、「所有（君臨）」の意味にとっておく。

62）校訂テキストの apayāpan を修正。

63）Mbh 5.39.45 はほとんど一致（pathyataram / pathyatamam の相違のみ）が、Mbh 校注で -taram とする写本は言及されていない。

64）校訂テキストの pathādānapetah を修正（注66参照）。

65）OJED 所収の引用例（s.v. paran, p. 1275）に従い、校訂テキストの maṅgah を修正。

66）後続の古ジャワ解説からすると、ここはサンスクリット由来の語句が引用されていると解釈し、和訳でもそのまま残しておく。本来のサンスクリットでは pathin（“a way, path, road”）の奪格は pathas だが、古ジャワ世界（少なくとも本テキストの古ジャワ語解説者の理解）では、patha の奪格として扱われていることが推測される。次の anapeta（“not gone off”）がこうした解釈を補強する。

67）Mbh 3.30.25 はほとんど一致（sakhyaṃ / saṃdhir の相違のみ）。ただし Mbh 校注に sakhyaṃ という異読は掲載されていない。

68）校訂テキストの tatukar を修正（atukar “to quarrel”）。

69）サンスクリット偈の pṛthivīsama を受けて、どんな点で大地と等しいかを適切に補っている。

70）Mbh 1.74.4 とほとんど一致（eva / iha の相違のみ）。ただし Mbh 校注に eva という異読は掲載されていない。

71）校訂テキストの maṅgah を修正。

72）Mbh 12.95.9 は前半の言い回しは異なるものの、主意は同じで、後半は同一である：

na vai dviṣantaḥ kṣīyante rājño nityam api ghnataḥ /
krodhaṃ niyantuṃ yo veda tasya dveṣṭā na vidyate //

73）文脈および OJED の引用例（s.v. wādha, p. 2162）をもとに、校訂テキストの kawadhan の綴りと区切りを修正。

74）校訂テキストは kakrodhanya とするが意味がとれない。先行する asiṅ から類推すると sakrodhanya という読みが想定される。というのも、siṅ および asiṅ は時として sa-（“all, each, every”）が後に続く（OJED, s.v. siṅ, p. 1775）からである。OJED 引用例（s.v. wādha, p. 2162）も参照。

75）校訂テキストの sadawāni の区切りを修正（dawā は “length” の意味）。

76）Mbh 5.27.23 は完全に一致する。ほかにも、部分的に異なるが類似の偈が見つかる。

Mbh 5.36.66（＝ MSS 3448）（b が全く異なるが acd は同一）：

avyādhijaṃ kaṭukaṃ śīrṣarogaṃ pāpānubandhaṃ paruṣaṃ tīkṣṇam ugram /
satāṃ peyaṃ yan na pibanty asanto manyuṃ mahārāja piba praśāmya //

Mbh 2.57.19（ab の一部が異なるが、cd は同一）：

avyādhijaṃ kaṭukaṃ tīkṣṇam uṣṇaṃ yaśomuṣaṃ paruṣaṃ pūtigandhi /
satāṃ peyaṃ yan na pibanty asanto manyuṃ mahārāja piba praśāmya //

77）校訂テキストは saṅ kiriman と区切っているが、OJED は kiriman という読みに疑問符をつけ、saṅkiriman（ないしは saṅkriman）がよりよい読みであると示している（s.v. kirim, p. 877; saṅkiriman, p. 1670）。これに準拠して読みを修正。

78）サンスクリット語ではなぞなぞを prahelikā というが、偈ではそういう用語で示していないにもかかわらず、古ジャワ語解説者が内容をふまえて的確に saṅkiriman（“riddle”）と古ジャワ語一語で提示しているところが注目される。

79）Raghu Vira は指摘していないが、Mbh 12.66.30がほぼ一致する：

ātmopamas tu bhūteṣu yo vai bhavati mānavaḥ /
nyastadaṇḍo jitakrodhaḥ sa pretya labhate sukham //

MSS 4679はさらに本偈に近い：

ātmopamaś ca bhūteṣu yo vai bhavati puruṣaḥ /
nyastadaṇḍo jitakrodhaḥ sa pretya sukham edhate //

Mbh 校注には、本偈の読みと一致する異読（例えば tyaktadaṇḍo）への言及はない。

80）OJED に登録された綴り（p. 595）に従い、校訂テキストの harimbawa を修正。

81）Mbh 5.70.60がほぼ一致する（tu / ca、sarvadā / nityadā の相違のみ）。ただし本偈と同じ読みは校注に言及されていない。

82）校訂テキストは sadākālādukha とするが、校訂注が掲げる他の写本の読みを採用する。古ジャワ語で dukha はそのまま形容詞的な意味をもち、adukha という派生形は OJED に登録されていない。したがって sadākāla に続くのは dukha であり、a が重なって長音になることはない。

83）MSS 4539は本偈と完全に一致する。Mbh 10.4.21は下線部のみ異なるがほぼ一致する：

āturasya kuto nidrā narasyāmarṣitasya ca /
arthāṃś cintayataś cāpi kāmayānasya vā punaḥ //

本偈同様 vā のかわりに ca とする写本はあるが、その他の読みは Mbh 校注で言及されていない。

84）Mbh 1.82.6及び MSS 122は本偈と完全に一致する。また *Matsyapurāṇa* 36.6もほとんど同一（c の主述が単数形という相違のみ）。

85）校訂テキストの anugrahaṇa を修正。OJED の引用例（s.v. lĕwih, p. 1018）は anugrahāna としている。anugrahaṇa（サンスクリットでは anugraha と同義の名詞）は OJED に登録されておらず、ここでは文脈から動詞派生形が期待される。Cf. aṅanugrahana, inaugrahan（“to show one’s favor to, confer benefits to, bestow a grant on）。

86）Mbh 12.288.27がほぼ一致する：

yat krodhano yajate yad dadāti yad vā tapas tapyati yaj juhoti /
vaivasvatas tad dharate ‘sya sarvaṃ moghaḥ śramo bhavati krodhanasya //

Mbh 校注によれば、yajati や dadāti という異読は一部の北方系写本に見られるようだが、それ以外の動詞の異読は tapate か hareta くらいである。印象としては、古ジャワ世界での受容の過程で、動詞が一律に -ti という語尾の能動態形に転訛したようである。

87）校訂テキストの sāwakan iṅ を修正。OJED の引用例（s.v. awak, p. 164）参照。

88）サンスクリット偈では太陽神 Vivasvat の子という意味で vaivasvata を用いている。vaivasvata は Manu（第 7 のマヌ）か Yama（ヤマ、最初の人間、最初に死に、死者の世界に君臨）を主に指す。文脈から明らかなように、本偈ではヤマ神のことを意味しており（英訳〈Ganguli 2002, p. 372〉参照）、古ジャワ解説者は的確にその名を示している。

89）Mbh 12.182.10と 12.316.11（両者は同一）は、b の rakṣec ca / rakṣeta の相違以外はほとんど一致。Mbh 校注によれば、北方・南方いくつかの写本が本偈と同一の読みを含む。Mbh.3.203.40は b で同じ相違があるほか、もう 1 箇所 c で avamāna / apamāna が異なる。avamāna という異読も北方・南方複数の写本に見られる。

90）IS 1974 は a の mṛtyus が rājā となっているところ以外ほとんど一致する。

91）ヒンドゥー教では、例えば *Garuḍa Purāṇa* の Sāroddhāra 2.15–26 に Vaitaraṇī 川に関する具体的な描写がある（Wood 1979, pp. 11–13 参照）。古ジャワ語解説者はそうしたインドの伝承を的確にふまえていることが読み取れる。古ジャワ文献では、古くは *Rāmāyaṇa* にも登場する (20.2) が、そこでは例え（「Waitaraṇī のように恐ろしい」）としてその名が言及されるだけである。

92）サンスクリット偈の kāmaduh- を的確に古ジャワ語でパラフレーズしていることがわかる。

93）サンスクリット偈では単に nandanaṃ vanam と述べるだけだが、古ジャワ語解説者は、それがインドラの住む天界の都 Amarāvatī にある楽園の一つであることをよく理解して、言葉を補っている。

参照文献

Böhtlingk, Otto

1966　*Indische Sprüche*, 3 vols., Osnabrück (reprint).

Ganguli, K. M. (tr.)

2002　*The Mahabharata of Krishna-Dwipayana Vyasa*, 3 vols., New Delhi (reprint).

Gonda, J.

1998　*Sanskrit in Indonesia*, Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, Volume 99, New Delhi (reprint).

Kern, Hendrik

1900　*Ramayana Kakawin: Oudjavaansch heldendicht*, ’s Gravenhage.

Madhava

2009　*Sarvadarśanasaṃgraha of Sāyana Mādhava*, Pune (reprint).

Mandik, V. N. (ed.)

1992　*Mānava-Dharma Śāstra*, 3 vols., New Delhi (reprint).

Monier-Williams, M.

1982　*A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford (reprint).

Raghu Vira

1962　*Sāra-samuccaya, a Classical Indonesian compendium of high ideals*, Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, Volume 24, New Delhi.

Sastri, R. A. (ed.)

1940　*Pasupata Sutras: with Pancarthabhashya of Kaundinya*, Trivandrum.

Sternbach, Ludwik

1974–2007　*Mahā-subhāṣita-saṃgraha: being an extensive collection of wise sayings in Sanskrit*, vols. 1–8, Hosiapur.

Sukhtankar, V. S. and S. K. Belvalkar (eds.)

1933–66　*The Mahābhārata, for the first time critically edited*, 19 vols., Poona.

Wood, E. and S. V. Subrahmanyam (trs.)

1979　*The Garuda Purana* (Sāroddhāra), Varanasi (reprint).

Zoetmulder, P. J.

1982　*Old Javanese-English Dictionary*, 2 vols., ’s-Gravenhage.

安藤　充
2002　古ジャワ世界における「バガヴァッドギーター」の受容について『印度学仏教学研究』（日本印度学仏教学会）第51巻第 1 号，pp. 449–455.
2018　古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(1)『人間文化』（愛知学院大学人間文化研究所紀要）第33號，pp. 117–137.
2019　古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(2)『人間文化』（愛知学院大学人間文化研究所紀要）第34號，pp. 141–167.

【電子テキスト】
Mahābhārata
http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil.html#MBh
Mahāsubhāṣitasaṃgraha, verses 1–9979
https://people.math.osu.edu/rao.3/utf/msubhs_u.htm
Matsyapurana, Adhyayas 1–176
http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/1_sanskr/3_purana/mtp176pu.htm
Nagarjuna: Bodhicittavivarana (fragments)
http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/1_sanskr/6_sastra/3_phil/buddh/nagbhc_u.htm
Narad-Parivrajaka Upanishad
https://sanskritdocuments.org/doc_upanishhat/naradparivra.pdf (in Devanagari, PDF)
https://sanskritdocuments.org/doc_upanishhat/naradparivra.html?lang=iast
Pasupatasutra: with Kaundinya's Pancarthabhasya
http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/1_sanskr/4_rellit/saiva/pasupbhu.htm